

## 「お酌禁止令」が出たんだって!?

他人へのお酌を禁ずる——長野県の板倉副知事の音頭で、県職員の宴会が今春、手酌酒に様変わりした。お酌を無理強いと感じる若手や女性は少なくなく、「気を使わなくて済む」「自分のペースで飲め、酒を残さなくなった」と歓迎され、全庁的に浸透しつつある——つい先ごろの朝日新聞のレポートです。

きっかけは、長野県内の蔵元が、県庁に日本酒のPRの要請に訪れたとき、県内のお酒の生産量が落ちている要因の一つとして、「最近はお酌を嫌う若者も多い」との発言があったことから。在豪日本大使館に勤務経験もある副知事は「お酌の習慣は欧米にはない。いやいや飲まされるという日本酒のイメージをなくすにも、お酌はいらぬ」と「お酌禁止」を宣言。「手酌で自分のペースで飲みましょう」と呼びかけているといいます。



職員からは「つぎに回らなければという気遣いや、空けなくてはというプレッシャーがなくなった」「宴会後、おちょこやコップに残っている酒が減った」と好評。村井知事も「二日酔いにならない手酌は大賛成」だと言っているそうです。

郷里にまつわるこの記事を読んで、「よくやったあ!」と拍手を送りたい思いにかられました。実は私も、特派員だった現役時代に海外から一時帰国したとき、いつも同じ思いにかられていたからです。

伊那の郷里に帰った際の宴会では、父からよく注意されたものでした。「武、どうしてお客さんにお酌をしないんだ!？」

「だって、飲みたい人が、飲みたいときに、飲みたいだけ、自分でついだほうがいいんじゃないの」を思っていたからです。でも再度にわたる忠告に、宴席が盛り上がるためにはと、とりあえずは指示に従ってお酌をして回ったものでした。

駐在していたパナマではこのような習慣はありませんでした。訪れた中南米やヨーロッパの国々でもそうでした。ヨーロッパには昔から乾杯の文化があります。それはみんな



同時に杯を空けることで一体感を共有することになりました。ものの本によると、日本に乾杯の習慣が生まれたのは明治以降で、それまでは同じ盃から回し飲むことによって連帯感を育んだといひます。

(私の観測によれば) 今でこそ少なくなりましたが、この同じ盃で回し飲む、というのはあまり好きではありませんでした。美女が唇をつけた盃ならともかく、なんといっても衛生的によろしくない。しかも勧めてくる相手が上司だったりすれば断れない。「オマエ、オレの盃を受けられないっていうんかい」なんて言いがかりは一昔前の話しですが、酔ってくるとこんな状況も起こらないとも限りません。下戸またはお酒の弱い人にとっては「パワハラ」そのものでしょう。

とはいえ、親しい間柄では「さーさいっパイ」とお酌をすることで、より親密感を増し、また初めて会う人には、お酌が“お近づきのしるし”となり、対話が弾むきっかけとなることもあります。三々九度の“お酌文化”もあながちよう。要は理性と常識に沿って、ということでしょう。

元をたどれば、熱爛で「さしつ、さされつ」と口につけた盃を交換し合う慣習は「冬」のある日本の気候と「マアママ主義」の民俗性からきたものではないでしょうか。このあたりは、比較文化の論議の対象ともなりそうです。



気ままな“お酌談義”のつもりが、いつの間にか原稿のメーターが上がってきそうです。ひよんなことで、酒の上で筆がつまづかないうちに、この辺で“打ち止め”といきましょう。

なんてたって「酒は百薬の長」。私もお酒は大好きです。酒は楽しく飲むべきもの。お酒の効用・・・あのドイツの哲学者カントさえも言っていますヨ。「酒は口を軽快にする。だが、酒はさらに心を打ち明けさせる」って――。